

江戸・明治期のおかず番付 (第2報)

都立立川短大 ○石川尚子

目的 本報告は昨年発表した第1報の続報として、江戸後期から明治期にいたる大変革期を経た庶民の副菜が、どのように変化したのか、あるいは変化しなかったのか、時間的経過にそって検討し、庶民食生活をダイナミックに把握しようとしたものである。もとより番付類には、実態を正確に把握するには一定の資料的制約はあるけれど、当時の庶民の食物に対する価値観を知る手だてとなり、また、数々の問題点を抱え食教育が急務である今日の食生活に多くの示唆を与えるものと考えからである。

方法 新たに入手した「日々菜早見」を加えた9点の「おかず番付」を資料として、そこに取り上げられた料理名から、材料・調理法・調理器具などを類推して分析を行う。その結果をもとに、各料理をどう東西へ分類したか、番付順位の意味づけ、行司や勸進元等に見立てた食品・食物、時代による料理の変化、庶民食生活に与えた「おかず番付」の教育的影響等について、明治時代発行の料理書との比較において考察を試みる。

結果 一連のおかず番付の原点と思われる「日用儉約料理仕方角力番附」から新しいタイプの「和洋料理番附」まで9種類の資料を分析した結果、料理数は212種から433種と幅があるものの、和風料理に関しては、材料・調理法・調理器具ともほぼ同一の内容が伝承されている。しかし、時代の変化とともに肉料理も出現し、「和洋料理番附」では一挙に165種の西洋料理が掲載され、庶民食生活の新たな展開が示されている。